

## 【今週の注目疾患】

## 【咽頭結膜熱】

咽頭結膜熱 (pharyngoconjunctival fever, PCF) は発熱、咽頭炎、眼症状を主とする小児の急性ウイルス性感染症である。5～7日の潜伏期を経て、発熱、頭痛、食欲不振、全身倦怠感とともに、咽頭炎による咽頭痛、結膜炎にともなう結膜充血、眼痛、羞明、流涙、眼脂などの症状を呈する。症状は3～5日間程度持続し、永続的な障害を残すことは通常ない。生後14日以内の新生児に感染した場合は全身性感染を起こし、重症化することがあることが報告されている。本疾患の原因であるアデノウイルスは、特に季節特異性が少なく年間を通じて分離されるが、疾患としての咽頭結膜熱は通常夏期に地域全体で流行し、5、6月頃から徐々に増加しはじめ、7月前後にピークを形成することが多い。季節性流行の場合は、学童年齢の罹患が主であるとされている。感染経路は、通常飛沫感染、あるいは手指を介した接触感染であり、結膜あるいは上気道からの感染である。プールを介した場合には、汚染した水から結膜への直接侵入と考えられている。特異的治療法はなく、対症療法が中心となる。眼症状が強い場合には、眼科的治療が必要になることもある。

予防としては、感染者との密接な接触を避けること、流行時にうがいや手指の消毒を励行することなどである。消毒法に関しては、逆性石鹼、イソプロパノールには抵抗性なので注意を要する。

県内小児科定点医療機関から報告される咽頭結膜熱の2017年第18週における報告数は定点当たり0.31(人)となっている(図1)。定点当たり報告数の多い上位3保健所は野田保健所(2.00)、習志野保健所(0.70)、松戸保健所(0.56)であった(図2)。現在大きな発生を認めているわけではないが、全国的には、過去5年の同時期より報告が多いこと、今後夏季に向けて報告が増加することが予想されるため注意を要する。

図1：千葉県内小児科定点から報告された咽頭結膜熱の直近5年(2013～2017年第18週)の定点当たり報告数

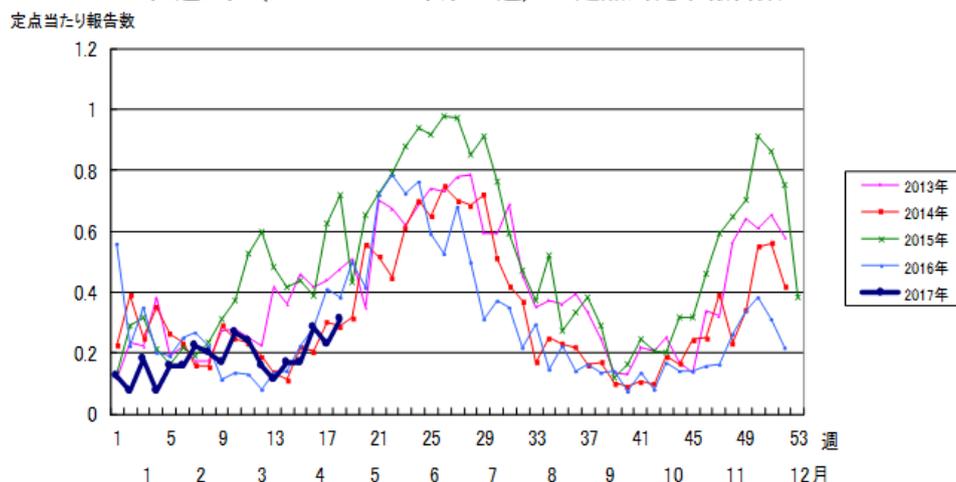
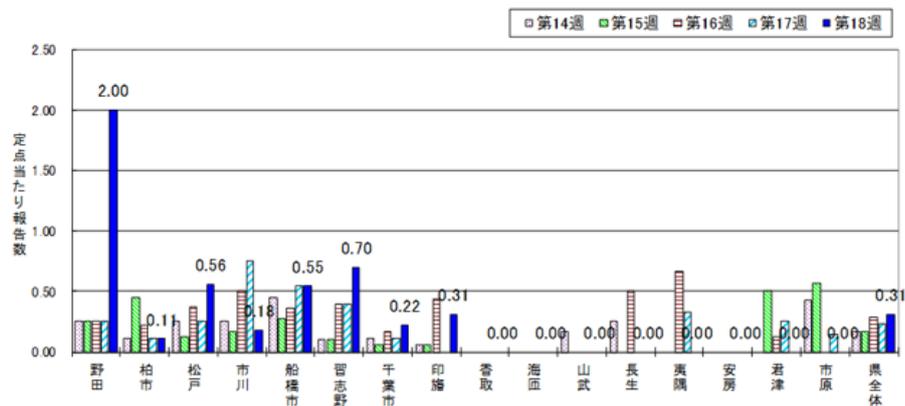


図2：咽頭結膜熱の直近5週（2017年第14～18週）の保健所別定点当たり報告数



参考・引用

国立感染症研究所 咽頭結膜熱とは

<https://www.niid.go.jp/niid/ja/diseases/a/adenopfc/392-encyclopedia/323-pcf-intro.html>

国立感染症研究所 感染症発生動向調査 週報 (IDWR)

トップページ ; <https://www.niid.go.jp/niid/ja/idwr.html>